【2016 年度 TQM 奨励賞受賞】

ーこれまでの積み重ねを評価され、さらなる自信を得られましたー

株式会社光栄　代表取締役社長　坂本　典昌氏

当時を振り返ると、私自身も、また会社としても、確固たる自信もなく、誇りなど持ち合わせていませんでした。1998 年頃から経営全般におけるご指導をいただくようになり、少しずつ少しずつ実力がついてきたように思います。それが業績にも繋がり、お客様から頂く評価も高まってきました。いつしか、「我々のこの取組みは、世の中からどう評価されるのだろうか」と考えるようになりました。これまで社員のみんなで頑張って活動してきたことに対して第三者の方々からの評価を頂きたい。更に、もし受賞できれば、社員にとっても大きな自信になることだろう。また、理想とする会社になる為のご指導も頂きたい、という思いで受審することを決めました。

受審にあたって、実情説明書を作成することは本当に大変でした。しかし、これまでの取組みを時系列で振り返ることができ、棚卸することができました。貴重な機会を頂き感謝しています。「ここは社員のおかげでうまくいっているな」「ここには、こういった悪さがあるぞ」といった点がいくつも見えてきました。過去のあの活動があったから今のこの活動につながっている、というふうに一つ一つ整理ができ、その過程を再考することで、活動の将来像をイメージすることに繋がってきました。

TQM 奨励賞の審査では、方針管理について改めて考える機会を頂けたことが大きかったと考えています。私の頭の中で考えていることを社員のみんなに時間をかけて説明できていなかったことや、全ての意見を聞ききれていなかったことに気づかされ、反省することができました。今は、ビジョンはこうで、それを達成するために今年はこうなんだ、という点を丁寧に説明しています。方針を伝えた後は、キャッチボールの重要性を強く意識し、社員のみんなから意見をもらうようにしています。特に我が社は全員参加経営を目指していますので、社員みんなの考え方を尊重していく、ということをこれまで以上に重視するようになりました。

現場審査においては、指摘を頂だいた点が今の活動に生きています。課題があることは自分たちにもわかっていたのですが、少人数ということもありリソースを掛けることができなかったところがありました。優先順位を考え直すきっかけを頂き実戦に繋げています。　また、当社の特色である小集団活動や委員会活動に対しては、社長が次から次へと取組内容を増やしていくことで社員の負担を大きくしているという指摘をいただき、メリハリをつけた活動（選択と集中）についても考えるようになりました。

結果として 2016 年度の TQM 奨励賞を受賞することができましたが、準備から審査までの過程で多くの気づきを頂きました。全ての気づきを今の取組に活かすようにしています。

社員に受賞報告の際、「この賞はまだ 42 組織しか受賞していない、そしてほとんどが大企業ばかりの中、わずか 20 数人の会社が獲れたということはすごいことです。みんなのこれまでの取組みが評価されたのです。自信をもって行きましょう。」と伝えました。受賞後、社員はこれまで以上に積極的に生き生きとした提案や活動を推進してくれています。改善活動を手助けする「改善レスキュー隊」、心の美化をテーマに募集した「光栄マン川柳大会」なども新たな取組です。全ての活動に楽しく取組み、明るくいい雰囲気の会社にしていきたいと考えています。TQM は、総合的に力をつけていい会社を作っていくことだと思っています。我が社も全員でそれを目指して行きます。

©一般財団法人日本科学技術連盟 2019